
隣りに魔王を

スイッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隣りに魔王を

【Nコード】
N0900K

【作者名】
スイッチ

【あらすじ】
とある少女は青年と出会って変わった。

少女は椅子に身体を預け、開けた窓に顔を向けていた。足を覆う温かい赤色の膝掛けを、病的に色彩に欠けた左手が握っている。

何もない時は、こうしてあてがわれた部屋の外に意識を凝らせるのが少女の日課になっていた。

海辺の近隣に位置するこの家では、耳を澄ませば浜を打つ漣の音と鷗の鳴き声が聞こえてくる。まだ行ったことのない青い海は、少女の好奇心を煽る。

マグカップを二つ持った青年は、少女の部屋のドアをノックして返事を待たずに中へ入った。

熱いくらいに温めたミルクのマグカップを少女に渡し、自分は紅茶のマグカップを持って少女の傍らに立つ。

つい先月まで戦いばかりの殺伐とした日々を青年から忘れさせるくらい、ゆつくりとした時間。

青年は窓から目を離さない少女の黒髪を、愛しそうに撫でる。

「なあ、勇者よ」

湯気の立つミルクを一口飲み、少女が青年に話し掛けた。

青年は相変わらず少女の頭に手を置いたまま、屈んで少女の顔を覗き込む。

燃え盛る炎を思わせる紅い瞳が、青年の金色の瞳とぶつかる。

「何？」

優しく聞き返すと、少女は一瞬躊躇ってから言った。

「何故私はこんなところにいるんだ？」

元魔王の純粹な疑問に、元勇者は肩をすくめた。

*

「君がここにいる理由は前にも言ったはずだけど？」

「理解が来ん」

元勇者は元魔王の身体を抱き寄せ、椅子から持ち上げた。片腕を勇者の首に回し、魔王は眉を潜める。

見た目通り華奢な少女の力しかない魔王に、十年以上鍛えられてきた人間の首を絞める力はない。

膝掛けが床に落ちる前に魔王を横抱きし、勇者は目の前の胡散臭いものを見るような目に苦笑する。

「勇者と魔王の歴史は数百年の間繰り返されてきた。その歴史を遅らせるために僕達はここにいるんだよ」

「遠回しな言い方をするな」

意味がわからず不貞腐れた魔王に胸板を思いつ切り殴られた勇者は、わざと身体を支える手に力を抜き、落としたけた振りをする。

少女らしい悲鳴を上げ、魔王は勇者にしがみつく。
心拍数の跳ね上がった魔王は跳ね上げた原因を睨みつける。

「勇者のくせに卑怯だ」

「今は勇者じゃないからね」

最もな事ではあるが、それはそれで卑怯な手段が許されるわけではなく、魔王はもう一度卑怯だと罵った。

「魔王は魔を統べる者だと長年信じられてきたのは知ってるよね？」

「馬鹿馬鹿しい」

隣の部屋へ移動した勇者に椅子の上に降ろされ、ホツとしながら不機嫌に吐き捨てるという芸を熟す魔王。

勇者はつい頭をぐりぐり撫でて手を叩かれる。

が、弾かれたのは魔王の手の方で勇者はさらに魔王の髪をめちやくちやにしていく。

「まあ、君のおかげで長年の誤解は解かれたわけだ」

魔王とは魔を統べる者。

理性を持たない魔物をけしかけ、人を襲わせる存在だと思われるてきた。

村を、町を、城を攻める魔物の軍勢は後を絶たず、その残虐性は人との共存を拒む。

とりわけ魔族と呼ばれる理性を持つ人型の魔物は人を苦しめ殺すことを楽しんでいる節すらあった。

魔物と魔族。

そして魔の頂点に君臨する魔王。

人々は魔王の存在に恐れ畏怖し、舐めさせられる辛酸に憎悪を募られた。

だけど真実は。

「君の魔力は魔物を強化し活性化させる」

勇者が初めて魔王と出会ったとき、彼女は地下牢に閉じ込められていた。

痩せこけ弱り切った彼女の身体は、牢から逃げられないようにだろう、右足は足首から先がなく、右腕は肘から先がなかった。

残った左足は枷が嵌められ、少女の力では絶対に壊せない頑丈な鎖が、閉じた牢に少女の身体を繋いでいた。

魔物が欲しかったのは、自分達を統べるものじゃない。

魔物が欲しかったのは力だ。

自分達の力を強めてくれる魔力の持ち主を、魔物達は飼い殺しにしていた。

想像通りの悪がいたなら、勇者の剣は魔王を貫いただろう。だが、地下にいたのは非力で、魔物に身をボロボロにされながら何とか生きながらえているだけの少女だった。

「魔王は倒す度にまた新しい魔王が生まれると文献からわかっていたし、元々生け捕りが最適だと言われてたから、君がここにいないのは何らおかしくはないんだよ」

クローゼットにずらりと並んだ女性用の服からワンピースを取り出して、魔王に手渡す。

良ければ手伝おうかと耳元で囁くと、出てけと短い言葉と拳が飛んでくる。

それをひらりと避け勇者は部屋から出た。ドアに閉めて、脇の壁

に背中を預ける。

暇な時間、思い出すのはここに至るまでの道程。

「……嘘は言ってないさ」

だが本当の顛末を話すのは、今はまだ忍ばれる。

魔王と思われる衰弱した少女を牢から解放し、仲間と共に王のいる城へ連れ帰った勇者が聞かされた、少女の今後の処遇はあんまりな内容だった。

魔力の封印と、城の地下牢での監禁。魔物に捕われていた時と何も変わらない、人としての尊厳を踏み躪られた生き方の強制。

だが衝撃を受けたのは勇者一人だけのようだった。

勇者と苦楽を共にしてきた仲間達でさえ、それが当たり前だと納得している風だった。

『死にたい』

勇者は、勇者の名と聖剣の返還と引き換えに王に褒美をもらう権利がある。

これまでの勇者が欲しがったものは大金であったり、高い身分であったり、姫であったり、出身の貧しい村の援助であったりした。

王の面前に傳かすいた勇者は、人々に見守られながら、たった一つ王に願う。

かつて勇者と呼ばれていた青年が名と聖剣を捨てた代わりに、地下牢へ迎えに行った少女の第一声はそれだった。

*

「勇者？」

長いことぼんやりしていたらしく、ドアの隙間から魔王が顔を覗かせていた。

片足で跳ねて移動してきたのか、若干頬が赤くなっている。ドアの縁を掴む手がぶるぶると震えていた。なまじ身体が欠けている分バランスが取りづらそうだ。

「何でもない」

再び抱き上げた魔王の身体は、出会った当初よりずいぶん重くなっただと思う。

それでも十分華奢な体格だが。

「それよりいい加減名前で呼んでくれないかな」

「どうして？」

本気で不思議そうな顔をされ、勇者だった青年は少し傷ついた。

「もう、勇者じゃないし、ちゃんとした名前があるからね」

「勇者で慣れた。今更呼び方を変えるのは好まない」

「エリシア」

名前すらなかった魔王に付けた名前を呼ぶと、悪戯が見つかった子供のように魔王——エリシアの身体がびくつと反応する。

名付けて二週間程経つが、あまり呼ぶ機会がないせいか、未だに名前を呼ばれることに慣れていない。

時折呼んでみると過剰な反応で返ってくるのは面白いといえは面白いが、名付け親としては無性に悲しくなってくる。

「……イーノス」

根負けしたエリシアが、勇者の名前を呟く。

勇者——イーノスは満足そうに頷き、エリシアを玄関まで運んだ。

*

「今日は工房まで行こう。義足が出来たってさ」

軽々と車椅子に寄せ、髪と瞳の色を固定された色彩に染める魔術が掛かったブレスレットを足首に付ける。

普通は手首に装着するものだが、以前手首につけて邪魔もの扱いされてしまったから、足首に付けるのが常だ。

エリシアの黒髪紅眼がイーノスと同じ金髪金眼に変わる。

「変な感じ」

金に染まった髪の一房をつまみ、エリシアが呟く。

「そのうち慣れる」

車椅子を押しながら、イーノスは手前の自分と同じ金髪を撫でた。イーノスに対してはすぐに拳を振り上げるようになったエリシアだが、今は大人しくイーノスにされるがままに頭を貸した。

外で耳を澄ませば、より鮮明に海の漣を鼓膜が拾う。

目を凝らすと空の青に、鷗の白が散らばっていた。

遠くから見た見たことのない海は、空の青にも負けないほどに美しいのだと、エリシアはイーノスから聞いた。

見てみたい。

口にはしないが、そう思う。

「行きたい場所ある？」

タイミングを計ったようにイーノスは尋ねたが、エリシアは首を横に振った。

特別なものは一人で見たい。そう望むのは贅沢か、エリシアはまだ知らない。

「早く、義足」

「了解」

乗り手が急かすと押す側はおどけて答えてみせる。

力強く車椅子が走り出す。すぐに高い叫び声上がり、次いで笑い声が晴天の空に響いた。

ある青年がまだ幼い少年だった頃。

極寒の北の大地に住んでいた少年の所へ、南から王国兵がやってきた。

勇者となるべき者を迎えるために、厚い雪に阻まれた村まで王国兵はやってきた。

王国兵は嫌がる少年を無理矢理家族から引き離し、王様のいる都まで少年を連れて行った。

そして家に帰りたいがる少年を、来るべき戦いのためにと無理矢理鍛えた。

幾度となく襲い掛かる魔物の前に放り出され、死に物狂いで剣を振るった。

何度も死にかけ、何度も生還した。

生きて帰ってくる度、少年の武勇伝は増えていった。

増えれば増える度、少年の肩に皆の期待がのしかかった。

少年はますます戦いから逃れられなくなった。

少年の意思を無視して。

少年には自由がなかった。

青年になった少年が厄介な拾い物をしたのは、その拾い物が自分とよく似た境遇の持ち主だったからかも知れない。

(後書き)

どうしてこうなったorz

ここまで長くするつもりはなかったのに…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900k/>

隣りに魔王を

2011年1月28日01時23分発行